



# 世田谷文学館友の会

## 会報 第52号

平成29年12月19日

世田谷文学館友の会

〒157-0062

世田谷区南島山1-10-10

TEL 03-5374-9111

FAX 03-5374-9120

世田谷文学館・友の会共催講演

『なぜ人は文学に親しむのか』

小野正嗣氏『巢作り』として文学を聴く

柴田 光滋

——小野正嗣氏は一九七〇年大分県生まれ。東京大学教養学部で比較日本文化論を専攻。パリ第八大学の博士号を取得している。現在は立教大学文学部文学科教授。

などという堅苦しい紹介より、二〇〇一年に「水に埋もれる墓」で第十二回朝日新人賞、二〇〇二年に「にぎやかな湾に背負われた船」で第十五回三島由紀夫賞、二〇一五年に「九年前の祈り」で第一五二回芥川龍之介賞をそれぞれ受賞している小説家、というほうが友の会の会員には身近に感じられるだろう。

急いで付け加えれば、その文学活動の幅は広い。小説に限らず、エッセイ、評論、翻訳（ナイポール『ミゲル・ストリート』共訳）、マリー・ンディアイ『ロジャー・カール』ほか）などに及ぶ。

今回の演題は『巢作り』として文学。

この「巢作り」という言葉が象徴的な意味合いで使われていることはすぐにわかるが、そこから先はややわかりにくい。「巢作り」と「文学」がどのように結びつくのだろうか。小野氏は冒頭「二本立てで話したい」と切り出した。前半は「日本文学における外国文学の影響」、後半は「書くこ

と読むこと」である。

外国文学の影響に関しては、村上春樹氏を例にこう述べる。

村上氏は処女作「風の歌を聴け」をはじめは英語で書いている。日本語でどんなふうにして書いているかわからなかったからだという。原稿用紙に日本語で書いたらどうしても

文学的過ぎるものになってしまう。あるいは装飾華美な文章になる。母語であるがゆえに不自由なのだ。そこで母語でない言語でまず書いた結果、最終的には日本語でもニュートラルな文体、独自の文体が生まれることになった。逆説的にいえば、彼は日本語から解放されたのである。



軽快に話される小野 正嗣氏

2017年9月23日 於・文学サロン

同様の例を一つ挙げておこう。劇作家サミュエル・ベケットは「ゴドーを待ちながら」を出身地のアイルランド語では書いていない。

使用したのはフランス語だった。つまり、言葉が遮蔽幕になるようにしたのである。

村上氏は非日本的作家とされることが多いが、実は日本の作家なのではないか。なぜなら、他の多くの日本の作家と同じように、翻訳文学で育っているからである。

戦前、第一外国語は英語一辺倒ではなかった。ドイツ語やフランス語も同等の存在であったのである。例えば、遠藤周作はフランス語を学んでいる。英語を必修の語学として学ぶのは大江健三郎氏あたりからだろう。実際彼はダンテの「神曲」を英訳で読んでいたという。

こうした流れに引導を渡したのが村上春樹氏であった。アメリカ的世界を日本の文学に根付かせたからである。

——ここから第二部の「書くことと読むこと」に入る。

作家とは単に書く人ではない。書く人と同時に読む人でもある。つまり書くというアウトプットと読むというインプットを怠らない。何にも読まずに作家になった人はいないはずだ。作家に訊けば、誰しも読むことが大事と答えるだろう。読んで感動し、自分も同じようなものを書きたいと思う。つまり、読むことが作家の土壌をつくるのである。

ではあるけれど、はたして本を読まない人は教養のない人なのだろうか。それはまた別

の話である。

言ってみれば、人とは本なのではないか。あるいは図書館なのではないか。本を読まない人でも、話はいっぱいしているからである。人間は口承的だとも言えるだろう。ネットワーク（関係性）のなかで生きているのだ。

そこには「読む」文化の代わりに、「聞く」文化がある。別の言い方をすれば、「語り」の文化、あるいは「語り部」の文化があるのだ。

話を戻せば、坪内逍遙にしても森鷗外や夏目漱石にしても、西洋の文学をいち早く受容している。彼らは外国語で読み、日本語に翻訳した。これは村上春樹氏も変わらない。ただ、全体でみると、昨今はかなりドメスティックになっているように思われる。戦後から七〇年代にかけて、文学の中心はヨーロッパであった。大岡昇平氏、遠藤周作氏、吉田健一氏、辻邦生氏などのフランス文学（念のために記せば、吉田氏は英文学だけではなかった）、あるいは古井由吉氏のドイツ文学までこの流れは続いた。また、ガルシア・マルケスなどのラテンアメリカ文学が注目された時期もあった。しかし、昨今はその影は薄い。日本における海外文学は、今は英語中心に変わってきたのである。

最後になってしまったが、本題に戻りたい。

人は何のために書くのか。私は「自分の居場所をつくるため」と考えている。

読んでいるときの自分はどこにいるのか。歴史のなかかもしれないが、現実には物語のなかに入っている、そこが居心地のいい「巣」になっているのである。

書きながら作っている巣あるいは巣穴が、読み手

の巣穴にもなっているのではないだろうか。文学というものはどこか子供の遊びと近い。なぜなら遊びというものは居場所となる空間をつくるからである。本を読むことは自分の居場所をつくることである。読者がいなければ本は単なる文字列に過ぎないだろう。

——まことに不十分な紹介を棚に上げていうが、文学論でありながらかなり哲学的でもあり、実に刺激的な講演であった。  
(友の会会員)

わたしの一冊  
『えんとつ町のプペル』  
西野亮廣著  
(幻冬舎)  
藤井保子

さて、西野亮廣というお笑い芸人をご存じだろうか。テレビなどで「お笑い芸人が書いた絵本」と話題になり、たくさんの人に読んでもらいたいと無料で見られるようにネット上に公開したのを見たのがきっかけで本を買った。

まずその絵の繊細さに惹かれ、次に文章を読んだ時、私は私の子供や孫たちに伝えてやりたいと強く思った。

場所とはある町。四千メートルの崖に囲まれ、えんとつだらけで、一日中もくもくと上がっている煙のため人々は青い空や煌めく星を見ることがない。外の世界を全く知らないのだ。

物語はこの町のハロウィンを楽しむ日から始まる。各々仮装をしている子供たちが、お祭りが終わり仮装を脱いで素の自分に戻るのだが、プペル（主人公でゴミ人間と呼ばれている）だけは仮装をしていた

のではなく体がゴミの集合体で出来ていることがはつきりする。汚さや悪臭のために益々仲間外れにされていく。えんとつ掃除を生業にしている少年ルビッチだけが彼の唯一の味方である。ルビッチもまた、町でただ一人の漁師だった今は亡き父親が以前見た星の話をしたことから、町の人から嘘つき呼ばわりされ差別されていた。本当に星空なんてあるのか、そしてお父さんは嘘つきなのかを確かめたくて、プペルが用意したたくさん風船をくくりつけた船に乗り二人で星を探しに行く。そしてそれを目の当たりにした時の感動！

これを読んだとき、人間を差別する愚かさを改めて感じた。そして地球温暖化によってこのような町を作らないよう、子供たちがいつまでも青空ときれいな星を見ることが出来るようにと強く願った。  
(友の会会員)

「エッセー」わたしの一冊の原稿募集中心

- ・タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記・字数は六〇〇字以内（厳守）
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回



## 「関東大震災と世田谷」

磯崎 憲一郎

数年前に『電車道』（新潮社）という、東京近郊の私鉄沿線の百年の歴史を描いた小説を書いたときに、世田谷区が平成四年に発行した『せたがや百年史（上下巻）』という資料を取り寄せて読んでみたのだが、その中で驚くべき事実を発見してしまった。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、関東地方南部一帯は史上稀に見る激震に襲われた、揺れは十分間近くも続いたという。東京府と近県の死者・行方不明者は十五万人以上、被災人口は住民の六割から七割にも達したのが関東大震災だったわけだが、私が現在住んでいる住所でいうところの世田谷区成城、当時の砧村（きぬたむら）の被害は、死者はゼロ、罹災戸数も全壊が三棟、半壊が三棟の合計六棟のみだったと、『せたがや百年史』には記されている。どうせ当時の砧村には住民なんてほとんどいなかったのだろう、と思われるかもしれないが、そんなことはない。大正十一年の砧村には五百九十八戸、三千六百八十人が住んでいたという記録が残っているのだから、もちろん現在の成城の街とは比べるべくもないが、決して人っ子一人住んでいない山林だったわけではない。関東大震災の甚大な被害を考えてみれば、砧村の死者ゼロというのは奇跡のようにさえ思えてくる。

因みに世田谷六か町村全体の被害は、死者五名、

負傷者十二名、行方不明者三名だったのだが、六か町村全人口三万九千九百五十二人に對して見れば、やはり明らかに被害は小さい。良く知られているように、関東大震災の死者の大半は建物の倒壊による圧死ではなく、地震後間もなく都市部に発生した火災による焼死者だった、對して当時の世田谷には密集した住宅地はほとんどなく、隣家との間隔の開いた農家が多かった、加えて地震当日は朝方まで雨が降っていたため、雨が上がった昼前から農作業に取り掛かっていた農民たちは、地震発生時まだ昼食の準備のための火を熾しておらず、結果的に火災を免れたともいわれている。

しかしこういう資料を読んでしまつて改めて思い知らされるのは、人間は都市化、近代化を進めたことによつて、ひとたび天災が起これば自らと家族の生命を失い兼ねないリスクを高めていた、という史実ではないだろうか。当時の砧村にはまだ養蚕農家が多く残つていて、仙川へと下る斜面には一面桑畑が広がり、幼子をおぶつた少年少女達が歌を歌いながら桑の葉を摘んでいたのだという、その平穏な光景に想いを馳せる。

だが震災によつて、防災基盤の脆弱な都市部ではなく、安全な郊外地域に住宅を求める機運が高まり、大正末期から昭和の初めにかけて、世田谷地域の人口は急激に増加する。その大半は郊外に家を持ち、都心の職場との間を往復するサラリーマン層だった、そしてその足となったのが、小田急や京王といった東京西部を走る私鉄電車だったのだ。

作家紹介 千葉県生まれ。平成二十一年『終の住処』で、第一四一回芥川賞受賞。世田谷区在住。

わたしの一冊  
『新派和歌評論』  
黒瞳子著  
(鳴臯書院)  
平林清江

平出修のことである。明治から大正初期を疾駆の後早世した「理智の人」平出が、明治三十四年、『新派和歌評論』を刊行した目的は、歌論家として与謝野鉄幹・晶子の作品を称揚し、旧派和歌との決別を企図、近代和歌史の奔流の中で、新しい時代の歌を牽引することにあつた。

本著において、平出は鉄幹・晶子の他にも、多くの歌人とその和歌を紹介している。それは、新しい時代の歌を集めた「新派歌人曼荼羅図」であり、その曼荼羅図を内包した和歌の宇宙空間の体を成している。それ故、われら読者はこの宇宙にて、「やは肌の」や「髪五尺」などの歌の魔力に酔いながら、平出の胸のすくような語り口と、明快な評論を楽しむことが出来る。

しかし、同時に窪田通治(空穂)の新詩社離脱と、子規の重病のさなかで、近代和歌の未来を模索する、平出の孤独な苦悩も知るようになるのである。また、実作の人としての平出は、多くの作品を『明星』や『スバル』に発表したのが、晶子に傾倒しその生涯かけて、晶子ばりの歌を詠み続けたのは何故であろうか。晶子という天性(天然)の歌人の歌を潜りながらも、「理智の人」平出が、ついに持ち得なかった強靱な歌の根源の力を、わが物とする闘いであつたように思われてならない。(友の会会員)

講座 大木昭男氏『夏目漱石と露西亜文学―漱石の読んだ「露西亜の小説」とは?』を聴講して

### 謎の日記解明から「則天去私」へ

堀 伸雄

漱石は没年の大正五年(1916)の日記に、「O Life 露西亜の小説を読んで自分と同じ事が書いてあるのに驚く。さうして只クリチカルの瞬間にうまく逃れたと逃れないとの相違である。といふ筋」という謎めいた書付けを残している。今回の講座は、この日記の断片が意味するところを読み解き、これを手掛かりに漱石とロシア文学との係わりにつなげ、さらに漱石晩年の東洋的世界観「則天去私」への道筋を考察する知的魅力に充ちたものであった。

大木昭男講師は丹念な文献調査の積み重ねにより、その謎の解明に挑む。漱石山房の蔵書目録に残されているロシアの作家は、アンドレーエフ、ゴロリキイ、トルストイ、ツルゲーネフ等十名にも上るが、意外なことにドストエフスキイの名前が見当たらない。しかし、漱石は『白痴』の英訳版を弟子の森田草平から借りて読んでおり、主人公のマイシユキンが語る処刑場での情景等を日記に書き残している。『明暗』にも登場人物がドストエフスキイを語る場面がある。そのため、漱石の読んだ「露西亜の小説」はドストエフスキイ『白痴』ではないかと推定する説もあった。

大木氏は、それでもなお『白痴』説への疑念を捨てきれず、漱石が『明暗』を執筆中の頃、森田草平等に対し貸していたある英文書籍の返却を要請した書簡に着目、それがトルストイの長編『アンナ・カ

レーニナ』であり、自ら執筆中の『明暗』と同様に、「愛」が引き起こす男女間の和合(明)と不和(暗)の人生が描かれていることに漱石が気付き、漱石が記した「クリチカルな瞬間にうまく逃れた云々」とは、登場人物すなわち『明暗』の「延子と津田と清子」、『アンナ・カレーニナ』の「カレーニンとアンナとウロンスキー」の愛憎の三角関係が決定的な破局を回避できたか否かであると推論。その傍証として、一九四八年製作の英国映画『アンナ・カレーニナ』(監督ジュリアン・デュヴィヴィエ、主演ヴィヴィアン・リー)を紹介。ラストでアンナが鉄道自殺を図る場面の英文字幕に表示された「人生」を意味する「Life」の単語と、原作の英訳にある「Darkness」(Brightness)の表記に着目、『明暗』との関連を明言された。

さらに氏は、『アンナ・カレーニナ』の最終章で、地方の純朴な地主であるレーヴィンが自らの生き方に覚醒する「己れの欲得のためではなく、神のために生きる」という農民の言葉に、漱石が晩年に至った「則天去私」の心境と共通したものを感じていることを読み取り、漱石がその死の直前に「蓋天蓋地は無心」と心境を詠んだ漢詩の朗読をもって講座を締め括られた。

大木氏は、漱石未完の大作『明暗』と長篇『アンナ・カレーニナ』の底流をなす世界観の共通性をスケールの大きな視点から見事に論破された。講義の途中では「カチューシャの唄」の一節を口ずさむなど、朗朗たる声量と悠揚とした雰囲気の中、漱石生誕一五〇年にふさわしい講座であった。

(友の会会員)

(平成二十九年六月十日 世田谷文学館にて開催)

講座 『夜明け前』から『竜馬がゆく』へ  
透谷と子規をとおして

溝田 誠

講師の高橋誠一郎先生は比較文学、ロシア文学がご専門で、今回は幕末から明治初期まで、その時代を象徴する作品、作家、人物を登場させ、日本の近代国家形成過程の再考察、またその問題点、そしてそれが今日の日本の状況を把握する上でどの様なヒントになるかの問題提起がなされた講義でした。

取り上げられた作品、作家、登場人物は書籍、映画、大河ドラマでそれぞれに馴染みはあるものの、友の会の講座案内に述べられていた「神国思想」の危険性、「憲法」の重要性などからの視点はとても興味深く、互いにどの様に関連づけられるのか、今までと違った解釈での読み直しの機会になるかと思いい講座に臨みました。

今回の講義内容は最後に紹介された司馬遼太郎の「明治国家の続いている八十年間は、その体制側にたつてものを考えることをしない人間は乱臣賊子とされた」。「竜馬も乱臣賊子のひとりだった」(竜馬像の変容)に全て要約されていると思えました。つまり登場した人々、『夜明け前』の青山半蔵、その作者島崎藤村、北村透谷、正岡子規、皆、それぞれに時代への処し方、考えの違いはあったにしても、一樣に明治からの国権的政府に抗い、物を申した人々であった点で共通している。坂本竜馬も「政治というものには人民の幸福のために行う」という建前で書かれているオランダ憲法に感動していることからして同じことが言える。

ではそれは何に対する抗いか? 長く続いた封建

時代の後に王政復古がなされ、人々は平民が主役の自由で平等な社会を期待していた。だが実際はそれに反し、天皇の権威を過剰に肥大させた軍人中心主義、それを強固にする為の「軍事勅令」や「教育勅語」の制定、その中心に「神国思想」があった事への抗いだったと思われます。

現在国内では憲法改正、「教育勅語」の授業化などの議論がありますが、この機会に取り上げられた作品を再読し、当時の彼らの思いを再考することが、逆に今日の日本を考える上でとても大切ではないかと考えさせられた講義でした。(友の会会員)

(平成二十九年四月十六日、らぶらすにて開催。)



## バスで行く秋の山梨文学散歩に参加して

貴船 キヨ

台風も無事に去り、秋晴れの十月三十一日参加者五十一名を乗せてバスは、新宿から見学地の山梨にむかった。午前中は山中湖文学の森の「三島由紀夫文学館」、「徳富蘇峰館」その後一宮で昼食をし、午後から甲府市にある芸術の森公園のなかの「山梨県立文学館 津島佑子展」「県立美術館 ミレレー館」を巡る内容豊富な一日コースである。

ベテランガイドさんの説明を聞き、車窓より富士の雄姿をながめつつ山中湖文学の森に着いた。

苔むしたがっちりした門を通りぬけ、まず落ちついた茶色の建物・蘇峰館に入る。山中湖を愛した氏の別荘「双宜荘」の生活や床の間つきの書齋が再現され、直筆原稿、書簡、絵画、尊敬したという勝海舟の写真等の展示、またたくさんの愛蔵した印鑑、収集愛用したおもしろい形の杖五十本も展示。わが家の近くの盧花公園に蘇峰の書いた「徳富健次郎墓誌」があり、たまに参拝しているせい何か何となく親しみのある館であった。



秋晴れの中、車窓から見る富士山の雄姿。

2017年10月31日

撮影・幾田充代氏

歩いてすぐの三島文学館に移る。カラマツ林と紅葉の美しいドウダンツツジに囲まれた、白く近代的な建物である。三島文学の拠点として、直筆原稿、創作取材ノート、たくさんの初版本の著書等の展示。

炎の表紙の『金閣寺』の本の前で、主人公溝口の告白に反発しつつ読み終えたことを思った。また「潮

騒」のポスターの青山京子、久保昭、もう一方は吉永小百合、浜田光夫をなつかしくながめた。ここで三島事件を思い出した。市ヶ谷自衛隊駐屯地のペランダではち巻をし演説をしていた氏の映像。小説家、劇作家、評論家等すべてが超一流といわれた人がなぜ割腹自殺をしたのだろうか。わからぬままに退館。

紅葉の山中湖に別れを告げ、車中で津島佑子作『火の山―山猿記』の朗読を聴くうちに、あつという間に「里の駅 いちのみや」に着いた。おいしい牛肉の陶板焼の昼食を終え、満足して午後からの見学地芸術の森公園にバス移動。いちよの黄葉の美しい広々とした公園。芝生、大きな彫刻数点、三角形にきっちり刈り込まれた木々は非常に印象的。

壁に掲げられた津島佑子展（メガネをかけた笑顔の写真）の大きなポスターを見て文学館に入る。展示の直筆原稿は、青インクの万年筆で書かれすべて読みやすい。また母方の系譜を追った長編小説『火の山―山猿記』の著作、母美知子とその実家石原家、父修治（太宰治）などの関連資料の紹介あり。この本はややこしい作り方のせい何か何回も母方の系図を思い浮かべてなんとか読み終えた。展示物の中に戦時中のものであり感心した。母美知子の妊産婦手帳、叔母愛子の着物と帯、津島修治の地下足袋の断片等。津島佑子が癌で逝ってしまったのは残念。白百合大文学祭の散策時に見たステンドグラスの百合のような人を連想した。

最後にミレレー館を見学。「種をまく人」の解説あたりで残念ながら帰る時間となった。大変充実した一日であった。下準備せずに行っただけのみ反省。

(友の会会員)

講座 『戦争は女の顔をしていない』を読む』を  
聴いて

泊 秀行

講師の安元隆子先生（日本大学国際関係学部教授）からは、著者の人となり、本作品の成立経緯・内容につき専門的視点より詳細な説明がありました。

スベトラーナ・アレクシエヴィッチはベラルーシ国籍を持つ作家で、その作風は人々の証言を元に戦争や社会の真実を描くものであり、これが我々の時代における苦難と勇気の記念碑と言える多声的な叙述として評価され、二〇一五年ノーベル文学賞を受賞した。

本作品は、第二次世界大戦中の独ソ戦に、英雄ではなく生身の人間として参加した百万人を越えるソ連の元女性兵士の声を集めたものであり、愛国心や次世代のために戦うこと、身体が傷つくことへの恐れなどの女性兵士特有の感性、戦いの中の女性ゆえの虐待、戦争に行かない女たちによる戦後の精神的虐待等に係る五百人以上の証言で構成されている。まず驚いたのは、一九四一年から四五年の独ソ戦に百万人以上のソ連女性兵士が実戦要員として参加し、女性なるがゆえの数々の体験が赤裸々に語られる一方、スターリン批判も堂々と展開されていることである。

タイトルの『戦争は女の顔をしていない』の意味するところは、戦争を通じ彼女たち女性兵士が、著者の言う個人と全体、戦中と戦後という二つの心、二つの真実に引き裂かれた自己を生きざるを得なかった悲しみや苦しみを表したものだと思われるが、

個々の証言内容はある程度理解できる一方、深奥にあるものについては理解しづらい面も感じた。

スベトラーナは証言を集める中で、その証言の意味の大きさに戸惑い怖気づくことがあると吐露しているが、その時「道はただ一つ。人間を愛すること。愛を持って理解しようとする」と（「群像社」版、一八〇頁）と述べている。こうした彼女の証言者に愛を持って寄り添う姿勢や独裁政権にも屈しない姿勢が、この作品を単なる証言集にとどまらず我々に訴えかける「文学」へと昇華させているように思われる。

翻って、一九八五年のゴルバチョフソ連共産党書記長の登場や、一九九一年のソ連邦崩壊はスベトラーナの作家人生にいかなる影響をもたらしたか。仮にゴルバチョフのペレストロイカと表裏一体と言われるグラスノスチ（公開性）がなかったなら、今日我々が目にするのできる彼女の著作の多くは、その発刊に更なる時日を要したのではないかと思うゆえに、言論、出版、表現の自由はもとより情報公開の大切さを改めて痛感させられる。

今年の夏は、安元先生の本講座受講を契機に、スベトラーナ作品のうち、『戦争は女の顔をしていない』（三浦みどり訳）と『チェルノブイリの祈り』（松本妙子訳）―いずれも岩波書店刊―の二冊を久しぶりに緊張感を持って通読することができました。

改めて感謝申し上げます。

（友の会会員）

（平成二十九年七月二十七日 世田谷文学館にて開催）

ヨソの文学館・記念館

【ゆふいん文学の森・碧雲荘】

太宰治が一時暮らししていた荻窪（東京杉並区天沼）のアパート「碧雲荘」をご存知だろうか。昨年一月末、春の文学散歩にと下見に訪れてみると、碧雲荘はまだあった。もはや更地になるのを待つばかりとなった二月に奇跡が起きた。湯布院で「おやど二本の葦束」を営む橋本律子さん（六七歳）が自身の土地に移築を決断、三月末には解体された資材が湯布院に運び込まれた。そして、あの熊本・大分地震が起こった。しばらくは作業も無理であろうと案じていると、本震からちょうど一年目となる今年四月十六日に開館したという。

居ても立つてもいられず夏休みを利用して大分空港へ飛んだ。女将の橋本さんは新聞で拝見したよりずっと若々しくさばさばしたウーマンであった。移築された碧雲荘は小高い丘の上であり、振り向くと由布岳が一望できる。「ゆふいん文学の森」という名がついた。柚野真也館長（橋本さんの甥）に案内されて館内に入り、二階に上がってみると、五部屋の間取りも、『富嶽百景』に登場する便所もそっくり再現されている。便所の小窓からは豊後富士が。太宰関連の本や資料はもちろん、寄贈された文学全集などがずらりと書棚に並び、気に入った部屋や場所が好きだけ読書三昧。本を無料で交換できる古書店「輪廻転読」（りんねてんどく）のシステムもある。

太宰が暮らした場所は、青森県の「旧藤田家住宅」「斜陽館」、山梨県の「天下茶屋」くらいしか残っておらず、湯布院に太宰の記憶を残せたことに感謝せずにはいられない。

住所 大分県由布市湯布院町川北字平原

一三五四番二六

電話 ○九七七―七六一―八一七―

入館料 一般七百元（ドリンクセット付）

休館日 年末年始

（友の会会員 幾田充代）



素敵なし縁に感謝 ～宮崎より～

堀越 照代

世田谷区民ではないけれど、私は世田谷区が大好きだ。理由は幾つかあるが、まず、娘が住んでいる土地だからである。

長女が結婚して世田谷区に住むようになったのは平成十六年、九州の中でも端っこ宮崎からみると、東京の世田谷区は憧れの都会である。そこに、自分の娘が住民として住むことは、この上ない喜びだった。

京急線山手線から小田急線経堂で降りて娘の家に着く

短歌作りを楽しむ私の愚作である。羽田空港から娘のマンションに着くまでに乗り継ぐ電車を覚えようと作った。

東京に嫁ぎし娘は自転車に兒を乗せ走る吾の夢だ  
つた

私は若い頃、東京で自転車に乗っている人を羨ましいと思ったことがある。自転車に乗り、近所のスーパーで買い物：：というのはその土地に住む人がすることである。娘が自転車に子供を乗せ、幼稚園に送る姿を見て深い感慨を覚えた。

「世田谷文学館」を知ったのはこの頃だ。娘に借りた自転車を通りかかったおしゃれな建物に惹かれ中に入ったらそれはそれは素敵な空間だった。会報を頂いて帰り、すぐに「友の会会員」の申し込みをした。それから、会報が届くのを心待ちにしている。

東京の文字を見るたび東京の音を聞くたび思ふ人

あり

世田谷区を好きなもう一つの理由は、短歌の先生が世田谷区在住だからである。短歌結社「心の花」に入会したのは二十二年前、主宰の佐佐木幸綱先生とはその時ご縁を頂いた。

短歌に親しみながら私が目標としているのは、幸綱先生のお母様、由幾先生の歌である。

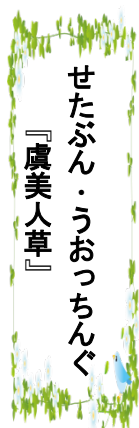
青嵐のただ中にて豊かなり吾に子のあり子に妻のある

帰土の日に一つ約束果たしたりと告げむ誇りを持ちてわが生く

佐佐木由幾

由幾先生のような歌人になりたいと思っている。その為には『万葉集』や『古今集』などの古典は勿論、詩や小説など文学全般を読まなければと、毎日読書に忙しい。

今度はいつ、世田谷文学館に行けるだろう。行く度に違う催しがあり、いつも感動し、刺激を頂いている。大きな楽しみである。(友の会会員)



鈴木 美奈子

『虞美人草』は漱石の作品でもあまり読まれない作品と言われます。何故でしょう。

世田谷文学館が所有する明治四十一年一月の復刻版、橋口五葉氏装書『虞美人艸』は観音開きの表函に納められ、中には「著作者 夏目金之助」と初版

時の筆名が記されています。實價壹圓五拾銭、春陽堂発行の一見の価値ある素敵な本です。この美しい装幀は、小説の主人公である誇り高き「我」の女、自ら虚栄の毒を仰いで死んだ藤尾にふさわしく、虞美人草は、この藤尾の遺体を囲む銀屏に描かれました。



この漱石の最初の長編小説は、朝日新聞に連載された当時は大評判の人気で三越から「虞美人草ゆかた」が売られたそうです。当時としては新しい女の象徴である藤尾と、古来から愛されてきた優しい女の糸子(『坊っちゃん』のお清の系列)との対比が話題

になったと考えられます。

後世になり敬遠されて、あまり読まれなくなった原因は、漱石の抜群の漢文的教養に溢れた美文調にあると言われ、ルビなしでは読めない漢字満載です。稜錘塔とはピラミッド、該撒はシーザー、スフィンクスは獅身女等など。明治の漢文学の教養を礎にしたこの遊び心。江戸っ子的なべらんめえ調の講釈、更には「この作者は趣なき会話を嫌う」と作者自身を地の文に登場させて大演説。

漢字と仮名を駆使するわが日本の文学の魅力をとことん追求した漱石の美文調とともに、近代の恋愛観とそこに息づく女性像を描いた問題小説として魅力ある小説と言えましょう。(友の会会員)



～こういう催しがありました～（2017年4月～2017年10月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2017年 4月16日	講座 『夜明け前』から 『竜馬がゆく』へ —透谷と子規をとおして	高橋誠一郎氏	幕末から明治初期の木曾街道・馬籠宿を舞台にした藤村の『夜明け前』、北村透谷の苦悩、この街道を旅した正岡子規、「憲法」の重要性を描いた『竜馬がゆく』、それぞれの意義に深く迫った。
5月13日	総会記念講演 『花あらし』 —小説の企みと朗読の楽しみ— (文学館と共催)	阿刀田 高氏 阿刀田慶子氏	自選の短編『花あらし』を最初に奥様で朗読家の慶子氏の朗読によって耳から味わい、次いで作者ご本人が作品の完成に至るまでの創作のヒミツを明かしつつ小説の魅力をご講演。作家がたくらむ小説の真骨頂に触れた思いであった。
6月10日	講座 夏目漱石と露西亜文学 —漱石の読んだ「露西亜の小説」とは？	大木 昭男氏	漱石は2年間の英国留学中、露西亜文学（英訳本、独訳本、仏訳本）をも読み込み、自分と同じ事が書いてあると驚く。とりわけ漱石晩年の未完の大作『明暗』とトルストイの長編『アンナ・カレーニナ』との比較考察は興味深く、漱石生誕150年記念の手応えのある講座となった。
7月27日	講座 ノーベル賞文学作家 スベトラーナ・アレクシェー ヴィッチの『戦争は女の顔を していない』を読む	安元 隆子氏	ベラルーシの女性作家でジャーナリストのスベトラーナ・アレクシェーヴィッチは2015年ノーベル文学賞を受賞、翌年来日。読み解いた著書は、独ソ戦において戦った旧ソ連の女性たちの「証言」を「文学」にし、人間の崇高さを描いていると熱く語られた。
9月23日	講演 「巣作り」として文学 (文学館と共催)	小野 正嗣氏	「文学作品を読む」行為を「巣を作る」という行為になぞらえ、読む者それぞれの「場」があることをお話された。文学が読まれなくなっていると言われる現在でもなお読まれ続けている証がここにあるのではないだろうか。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2017年 4月8日	散歩 桜の名所・我孫子手賀沼 畔に文士村あり～白樺文学館、 杉村楚人冠記念館、旧村川別荘 を中心に巡る～	平林 清江氏 田中 宏子氏 各館学芸員	風光明媚な手賀沼畔にこんなにも文人が住んでいたとは—柔道家の嘉納治五郎、白樺派を代表する柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤、柳の妻で声楽家の柳兼子、中勘助…。桜も満開の春の穏やかな一日、「はげの道」をしっかりと歩いた。
10月31日	散歩 バスで行く秋の山梨文学 散歩 ～山中湖畔の三島由 紀夫文学館・徳富蘇峰館、山梨 県立文学館「津島佑子展」を中 心に巡る～	各館学芸員	頻繁に発生した台風も漸く過ぎ、快晴に恵まれ紅葉と富士の雄姿を堪能した甲斐の旅となった。新大型バスに参加者51名と満席ではあったが、車中では会員による津島佑子著『火の山—山猿記』の朗読もあり、文学散歩らしい充実した秋の一日であった。

編集後記

＜永世中立＞この言葉を今年には繰り返し思い出した。私は新制中学一期生で「日本はこれから東洋のスイスのような国になる」と教えられこの言葉を覚えた。日本国憲法施行の頃だから心に刻んだ人も多かったに違いない。だが今は

誰も言わない、聞かない死語になった。私はアジアの緊張やテロの恐怖を聞く毎に日本が＜永世中立国＞で＜アジアのスイス＞だったらと空想した。山道で迷えば引き返せという、私たちは、今引き返せないのだろうか。（糸井 久）